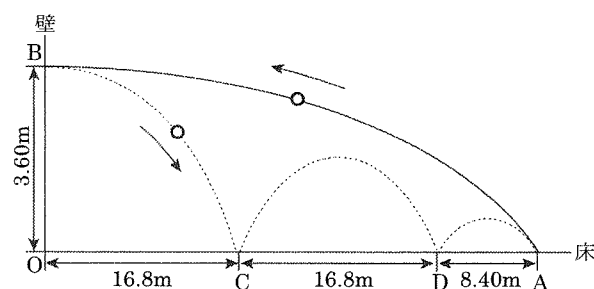


平成 31 年度 金沢医科大学医学部入学試験問題
一般入学試験（前期）【物理】

次の [1] ～ [4] の問題に答えなさい。〔解答番号 [1] ～ [60] 〕

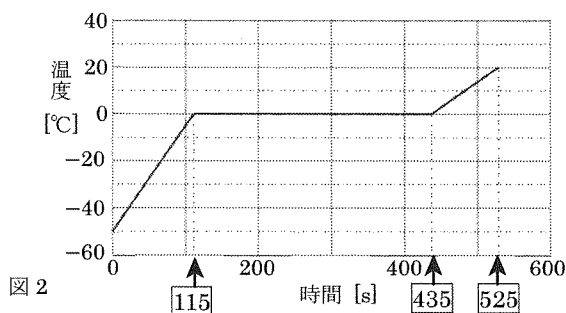
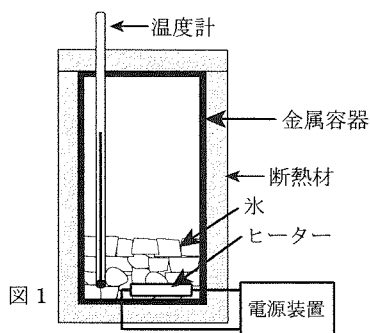
- [1] 図のように、いずれも滑らかな、水平な床と鉛直な壁がある。壁から水平距離で 42.0m 離れた点 A から、球を壁に向けて投げた。球は床から 3.60m の高さで最高点 B に達し、壁に垂直にあたってはねかえった。球は床を点 C、点 D で 2 回はねかえった後、はじめの点 A にもどった。床と壁の交点を O とし、距離 $OC = 16.8\text{m}$ 、 $CD = 16.8\text{m}$ 、 $DA = 8.40\text{m}$ とする。また、重力加速度の大きさを 9.80m/s^2 、球の大きさや空気抵抗は無視できるものとする。解答欄 [1] ～ [21] に入る数字をマークしなさい。



注) 図の鉛直方向と水平方向の縮尺は異なる。
また球の経路は大略である。

- (1) 球が点 A から点 B に達するまでの時間は $\frac{[1]}{[2]}$ [s] である。
- (2) 点 B における球の衝突直前の速さは [3][4].[5] [m/s]、衝突直後の速さは [6][7].[8] [m/s] である。
- (3) 球と壁の反発係数（はね返り係数）は 0.[9] であり、球と床の反発係数は 0.[10] である。
- (4) 球が AB 間を運動するのに要した時間を T_{AB} 、以下同様に BC 間を T_{BC} 、CD 間を T_{CD} 、DA 間を T_{DA} とする。
それらのもっとも簡単な整数比は $T_{AB}:T_{BC}:T_{CD}:T_{DA} = [11]:[12]:[13]:[14]$ となる。
- (5) 距離 OB を X 、CD 間における球の最高点の高さを Y 、DA 間における球の最高点の高さを Z とする。それらのもっとも簡単な整数比は $X:Y:Z = [15][16]:[17]:[18]$ となる。また、 $Z = 0.[19][20][21]$ [m] である。

- [2] 図 1 のように、断熱材で囲まれた熱容量 60 J/K の金属容器がある。この中に質量 200g の氷を入れたところ、氷を含む金属容器全体の温度は一様に -50°C になった。電力 200W のヒーターで加熱し、温度変化を測定したところ、図 2 の実験結果を得た。加熱開始 115 秒後に温度は 0°C となり、435 秒後には、氷は完全に融けて水となった。525 秒後には温度は 20°C になった。ヒーターと温度計の熱容量は無視できるものとする。また、断熱材と外部との間に熱の出入りはなく、金属容器とその中の温度は常に一様であるものとして、以下の設問に答えなさい。



- (1) 図 2 の結果から、氷の融解熱は [22][23][24] [J/g]、氷の比熱は [25] [J/(g·K)]、水の比熱は [26] [J/(g·K)] となる。
解答欄 [22] ～ [24] に入る数字をマークしなさい。解答欄 [25] と [26] は解答群から選びなさい。

[25] の解答群

- ① 1.6 ② 1.7 ③ 1.8 ④ 1.9 ⑤ 2.0 ⑥ 2.1 ⑦ 2.2 ⑧ 2.3 ⑨ 2.4 ⑩ 2.5

[26] の解答群

- ① 3.6 ② 3.7 ③ 3.8 ④ 3.9 ⑤ 4.0 ⑥ 4.1 ⑦ 4.2 ⑧ 4.3 ⑨ 4.4 ⑩ 4.5

- (2) 水を含む金属容器全体の温度が 20°C になった時、ヒーターで加熱するのをやめて、 -40°C の氷を入れた。(1) で得られた値を用いて、下記の条件をそれぞれ満たす氷の質量を求め、解答欄 [27] ～ [32] に入る数字をマークしなさい。

条件 I. 金属容器内に入れた氷がすべて融けた。このときの氷の最大質量は [27][28] [g] である。

条件 II. 金属容器内にある水がすべて凍るために、容器内に入れる必要のある氷の最小質量は [29][30][31][32] [g] である。

平成 31 年度 金沢医科大学医学部入学試験問題
一般入学試験（前期）【物理】

3 放射性同位体および放射線に関する、(1) から (4) の設問に答えなさい。33 ～ 35 は解答群から選びなさい。
36 ～ 54 に入る数字をマークしなさい。解答の様式に合わせて適宜小数を四捨五入すること。ただし、アボガドロ定数を $6.0 \times 10^{23} / \text{mol}$ 、電気素量を $1.6 \times 10^{-19} \text{ C}$ とする。

- (1) 放射線の測定単位として、吸収線量、33 などがある。被曝による放射線の吸収線量が同じでも、人体への影響は放射線の種類やエネルギーなどによって異なる。それらの違いを考慮した係数を吸収線量にかけた量が 33 であり、単位は 34 を用いる。医療で用いられている放射線として、35 がある。35 は電磁波であり、不安定な状態（励起状態）の原子核より放出される。

33 , 34 , 35 の解答群

① α 線 ② β 線 ③ γ 線 ④ X 線 ⑤ ジュール ⑥ グレイ ⑦ シーベルト ⑧ 実効線量 ⑨ 等価線量 ⑩ 照射線量

- (2) $^{235}_{92}\text{U}$ から始まる崩壊系列は、途中で $^{223}_{88}\text{Ra}$ が出現し、最終的には $^{207}_{82}\text{Pb}$ で終わる。この崩壊系列の中で、 α 崩壊は 36 回、 β 崩壊は 37 回起こる。

- (3) ある放射性同位体から $1.5 \times 10^5 \text{ eV}$ のエネルギーの放射線が発生している。この放射線のエネルギーの単位をジュールに換算すると 38 . 39 $\times 10^{-40 \quad 41}$ [J] である。放射能の強さが一定値で $3.7 \times 10^8 \text{ Bq}$ であり、この放射線のエネルギーすべてが質量 50 kg の人体に均一に吸収されたとき、1 時間あたりの吸収線量は 42 . 43 $\times 10^{-44}$ [Gy] である。

- (4) 生体の内部被曝について考えてみよう。生命活動に必須な元素であるカリウムには放射性同位体である $^{40}_{19}\text{K}$ が存在する。人体には質量比で 0.20% の K が含まれ、K 全体に占める $^{40}_{19}\text{K}$ の質量比は 0.012% である。質量 50 kg の人体に含まれる $^{40}_{19}\text{K}$ の質量は 45 . 46 $\times 10^{-47}$ [kg] である。放射能の強さ A は、任意の時間における放射性同位体の数 N と半減期 $T[\text{s}]$ より $A = 0.69 \times \frac{N}{T} [\text{Bq}]$ で表される。ここで、 $^{40}_{19}\text{K}$ の原子量より N は 48 . 49 $\times 10^{50 \quad 51}$ となり、半減期が 1.3×10^9 年であることを利用すると、質量 50 kg の人体に含まれる $^{40}_{19}\text{K}$ の放射能の強さ A は 52 . 53 $\times 10^{54}$ [Bq] となる。

4 55 ～ 60 に入る数字をマークしなさい。解答の様式に合わせて適宜小数を四捨五入すること。

- (1) 中性子は、アップクォーク u とダウンクォーク d の組合せで構成されている。中性子を構成している u と d の数は、それぞれ 55 と 56 個である。

- (2) 電力量 1 kWh は 57 . 58 $\times 10^{59}$ [J] である。

- (3) 密度が $1.0 \times 10^3 \text{ kg/m}^3$ の水に、密度が $9.2 \times 10^2 \text{ kg/m}^3$ の氷を浮かべたとき、水面より上の部分の氷の体積は氷全体の 60 % である。